

# 発話連続にみるポライトネス — 映画の会話場面の分析から —

大橋 まり子<sup>a</sup>

<sup>a</sup> 湘北短期大学

## 【抄録】

本稿は Brown & Levinson のポライトネスをもとにアメリカ映画の会話を分析するものである。映画のシーンから「依頼—応答」など隣接ペアを含む会話を抽出しデータとした。分析の結果、1) ポライトネスは相対的、かつ動的な現象であること、2) 話者交替を重ねることによりポライトネスの実現が図られること、3) 先行連鎖が FTA 回避行動として機能していることが分かった。

## 【キーワード】

ポライトネス      フェイス      会話データ      隣接ペア      スタイル・シフト

## 1. はじめに

本論はポライトネスを相対的で動的なものとして捉え映画の会話データをもとに考察するものである。近年、Grice (1975), Lakoff (1973), Leech (1983), Brown & Levinson (1987) などはポライトネスをより本質的で普遍的な人間行動を支配する要因のひとつとして捉えようとしてきた<sup>1)</sup>。ここでポライトネスという用語を確認しておく、ポライトネスはいわゆる丁寧さを意味するものではなく、また日本語など敬語体系を持つ言語における「敬語使用」と同義ではない<sup>2)</sup>。その定義を Brown & Levinson に倣って、ここでは「円滑な人間関係の確立・維持のための言語行動」としておく<sup>3)</sup>。

これまでポライトネスに関する多くの研究が報告がされているが、その多くは文レベルでの議論や発話行為に着目したものが中心である。しかし、ポライトネスを単に文レベルや発話行為だけを取り上げてその表現やストラテジーの組み合わせだけをみるのではポライトネスの実態は見えてこない<sup>4)</sup>。そこで本論は「依頼」や「申し出」といった発話行為だけを取り出して分析するのではなく、依頼—応答、申し出—応答、勧誘—応答といった隣接ペア<sup>5)</sup>を含む談話全体を対象に考察しようとするものである。具体的には、1) 隣接ペアでポライトネスの実現はどのようにはかれるのか、2) スピーチレベルのシフト、3) ポライトネスの逸脱、4) FTA 回避として機能する先行連鎖の4項目である。

分析には映画の会話場面をデータとして使用する。その理由は隣接ペアを含む談話の流れ全体の観察が可能であること、発話の場面、話し手と相

---

<連絡先>

大橋 まり子 HZA00103@nifty.com

手との関係など発話の状況が把握できること、また発話が限りなく自然に近いことによる<sup>6)</sup>。

本論の構成は、まず次節でポライトネスの理論を概観し本論の目的を述べる。次に第3節で映画の会話データの分析を行い、第4節で分析結果の考察を試みる。

## 2. 理論背景と研究の目的

### 2.1 ポライトネス理論

ポライトネスに関する論考としてGrice(1975), Lakoff(1973), Leech(1983), Brown & Levinson(1987) などがあるが<sup>7)</sup>, ここではその中でも最も包括的<sup>8)</sup>といわれるBrown & Levinson(1987)のポライトネス理論を概観する。

Brown & Levinson(1987)はGoffman(1976)のフェイスの概念を援用してポライトネス理論を打ち出している。Brown & Levinsonによると「人間にはだれでも人との係わり合いに関する基本的欲求としてフェイス<sup>9)</sup>がある」という。フェイスにはネガティブ・フェイス(negative face)とポジティブ・フェイス(positive face)の2種類あり、ネガティブ・フェイスとは、他者に邪魔をされたくない、立ち入れたくないという欲求、つまり他者と距離をおきたいという欲求であり、ポジティブ・フェイスとは他者に認められたい、好か

れたい、仲間とみなされたい、つまり他者に近づきたいという欲求として捉えられる<sup>10)</sup>。

… all competent adult members of a society have (and know each other to have)

‘face’, the public self-image that every member wants to claim for himself, consisting in two related aspects:

- (a) negative face: the basic claim to territories, personal preserves, rights to non-distraction – i.e. to freedom of action and freedom from imposition
- (b) positive face: the positive consistent self-image or ‘personality’ (crucially including the desire that this self-image be appreciated and approved of) claimed by interactants<sup>11)</sup>

しかしながら、われわれが日常行っている行為の中には本質的にフェイスを侵害するような行為があるとする。そのようなフェイスを脅かす行為のことをBrown & Levinsonは「フェイス侵害行為」(FTA: Face Threatening Act)としている<sup>12)</sup>。例えば、人に何かを頼むという行為は、その依頼の相手のフェイスを脅かす行為である。その依頼を相手が断ることは依頼者のポジティブ・フェイスを脅かすことになるから、相手はそれを避けよ

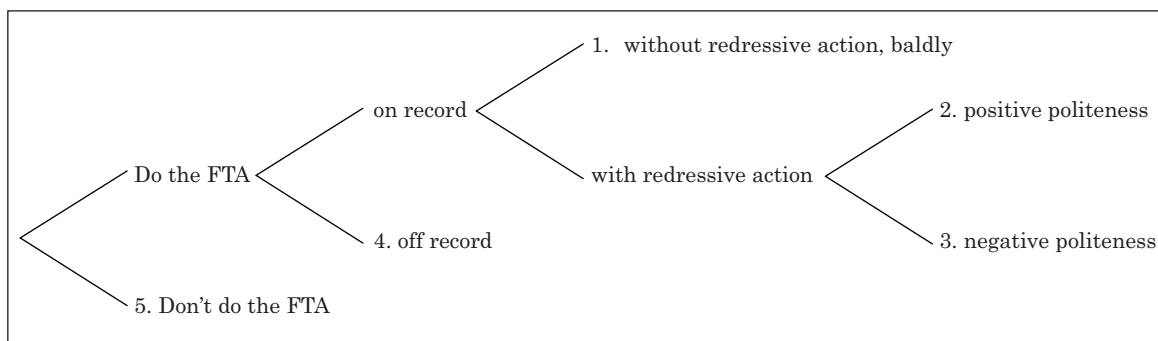


図1 FTAをするためのストラテジー (Brown & Levinson 1987: 69より)

うとすると断れなくなる。この依頼のような行為をFTAという<sup>13)</sup>。そして、このようなFTAを行う際には、FTAを緩和するため普通なんらかの策が講じられるが、FTAを行うためのストラテジーとしてとして次の4つの方略があるとする：1) あからさまに (bold on record), 2) ポジティブ・ポライトネスを使って (positive politeness), 3) ネガティブ・ポライトネスを使って (negative politeness), 4) オフレコで (off record)。そして、5番目のストラテジーとして「FTAを行わない (doing no FTAs)」がある (図1)。

Brown & Levinsonによれば、ポライトネスは、「ある発話行為が相手のフェイスを脅かす度合い」、すなわち「行為 $x$ が、相手にかかる負荷の度合い (R)」の見積りに応じて想定されるとする。この相手とのフェイスの侵害度は、三つの要因によって想定されるとして次のように公式化している<sup>14)</sup>。

$$(1) W_x = D(S, H) + P(H, S) + R_x$$

$W_x$ はある行為 $x$ が相手のフェイスを脅かす度合い、すなわちフェイス侵害度の重さのことであり、 $D$ は話し手 (S) と聞き手 (H) の社会的距離 (social distance),  $P$ は聞き手 (H) と話し手 (S) に対する「力」(power),  $R_x$ とは、特定の文化において「ある行為 $x$ が相手にかかる負荷度」(absolute ranking of imposition) を示していて、 $W_x$ が大きいほど話し手は図1にある高い番号のストラテジーを選択するとされている。以上、Brown & Levinsonのポライトネス理論の中心概念を概観した。

## 2.2 本論の目的

本論の目的はBrown & Levinsonのポライトネス理論が実際の会話の中でどのように実現してい

るかを調べることにある。ここではポライトネスを相対的かつ動的な現象として捉え、次の4点に着目し分析をする。

- 1) ポライトネス・ストラテジーと言語表現の関連
- 2) ポライトネスのダイナミック性を示すものとしてのスタイル・シフトの現象
- 3) フェイスの維持 (face-saving) とフェイスの侵害行為 (face-threatening)
- 4) 会話構造とポライトネス・ストラテジー

## 3. 映画会話データの分析

分析にはアメリカ映画から抽出した会話をデータとして使用する。分析対象の映画はYou've Got MailとNotting Hillの2本である。本論の目的は単一の発話行為だけを見るのではなく、発話行為を含む応答を包括的にみることにあるため、断りを誘発する隣接ペア；依頼-応答、申し出-応答、勧誘-応答を含む場面を中心にデータを抽出した。さらに、ポライトネスのダイナミックな展開をみるため隣接ペアを含む会話全体を分析の対象とした。データは映画の音声文字化されたものと出版された脚本の両方を使用する<sup>15)</sup>。

### 3.1 ポライトネス・ストラテジーの分析

ここでは映画のシーンから図1のポライトネス・ストラテジーが言語表現としてどのように実現されているか見ていく。

#### 場面1

(背景：Jが8歳のAnnabelle (A) と4歳のMattを連れて書店にいる。AがKに聞かれてはまずいことを言い出そうとしたためJはあわててAの発話を遮り、その場からAnnabelleとMattを遠ざけようとする)

- 00 K: They're opening a Foxbooks around the corner.  
 01 A: Foxbooks! My daddy—  
 → 02 J: —like to buy at discount. Don't tell anyone that, Annabelle. It's nothing to be proud of—  
 → 03 J: —Matt, look at this dinosaur book. Wouldn't you like a dinosaur book? Annabelle, maybe you could read this to Matt while I wrap things up here. Sit down, read, and don't listen to anything I say.

場面1では、発話(02)や発話(03)にDon't tell anyone thatやLook at this dinosaur bookのように直接的(Bold on record)依頼表現である指示が使われているが、それはこの場面が緊急を要する場合であることによる。幼い子どもに対する場合にも(03)にあるようにWouldn't you like a dinosaur book?と間接的表現やcouldやmaybeを使うことによりFTAの緩和が図られていることが分かる。

## 場面2

(背景: レジで現金の持ち合わせのないKは窮地に立たされる。そこにKを助けようとJがやってくる。Cはレジ係、Pはレジに並んでいる男性客)

- 01 C: This is a Cash-only line.  
 02 K: What?  
 03 C: Cash only.  
 → 04 K: Oh, my god. I just have a credit card. I'm sorry. Is that okay?  
 05 P: No, it's not okay, there is a sign.  
 → 06 K: I'm sorry. I'm very sorry. I never do this. But I ask you to make an exception in this one case?

(…)

- 07 J: Oh, hello.  
 08 K: Hello.  
 → 09 J: Hi. Do you need some money?  
 → 10 K: No, I do not need any money. Thank you very much.  
 → 11 C: Get on another line.

場面2はネガティブ・ポライトネスが使われている例である。まずK(04)では事実を認めて謝罪し許可を求めている。謝罪をすること、相手の許可を求めることはネガティブ・ポライトネスのストラテジーである。それに対し第三者であるPがNo, it's not okayと直接表現にthere is a signと一般規則を説明する。

次にJ(07)は申し出(09)を行う前の先行連鎖である。先行連鎖については後述するが、挨拶もポジティブ・ポライトネスのストラテジーであり、ここでは申し出を行う前のストラテジーとして捉えられる。J(09)は申し出、K(10)は申し出の拒否である。K(10)の応答はNo, I don't need any money.と直接的な表現による断りにThank you very muchと感謝のことは添えている。ここで断りをする事でKのフェイスは保持されるが、申し出を断られたJのフェイスは侵害される。

## 3.2 ポライトネスとポライトネス逸脱

次に、ポライトネスに適った例とフェイスを侵害することにより生じるポライトネス逸脱の例を見ていく。場面3はポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの両方が現れる例である。また、好ましく思っていない相手にはポライトネス逸脱行為をしていることが観察される。

## 場面3

(背景: Kはメール友達と初めて会うためカフェ

## 発話連続にみるポライトネス

で相手を待っている。そこへJが現れるが映画の中ではKとJはお互いに仕事上のライバルとして描かれている。Sはカフェの客で面識はない。Wはウェ이터である)

- 01 S: Do you mind if I borrow this chair?  
→ 02 K: Oh, yes. Sorry. I'm expecting someone.  
(…)  
03 W: Would you like another tea?  
→ 04 K: Yes. Thank you.  
(…)  
05 K: Oh!  
→ 06 J: Kathleen Kelly. (...) Hello. (...) This is a coincidence. (...) Would you mind if I sat down?  
→ 07 K: Yes. Yes I would, actually. (...) I'm expecting someone.  
(JはKの本に目を留めて)  
08 J: Pride and Prejudice.  
→ 09 K: Do you mind?

場面3では、ネガティブ・ポライトネスとポジティブ・ポライトネスの両方のストラテジーがみられる。ネガティブ・ポライトネスのストラテジーの第一に挙げられているのが「慣用的間接表現を使え」(Be conventionally indirect)である。また第二に「選択の余地を与えよ」(Give H option not to do act)の下位カテゴリとして疑問文が上げられているが、(01)のDo you mind if I borrow this chair?はこれらのストラテジーが言語化されている。SとKはお互いに面識がないためこのような慣用的な間接表現を使ってポライトネスを実現していることが分かる。

K(02)はSの依頼を断るが直接表現(yes)のあと謝罪(I'm sorry)とI'm expecting someoneと説明を加える。謝罪をすることも説明を加えることもネガティブ・ポライトネスのストラテジーで

ある。

次のJのターン(06)であるが、ここではポジティブ・ポライトネスとネガティブ・ポライトネスの両方のストラテジーを駆使した働きかけがなされている。まず相手の名前を呼ぶこと、挨拶、this is a coincidence(偶然だね)と知り合いであることを確認する発話はポジティブ・ポライトネスのストラテジーとしてあげられている。「[共通点]を主張せよ」(Claim 'common ground')に相当する。その後のWould you mind if I sat down?(座ってもいいかな)は(01)と同じくネガティブ・ポライトネスに適った表現である。

その後のターンK(07)はポライトネス逸脱の例である。K(07)はJ(06)の依頼をYes, yes I wouldと拒否しI'm expecting someone.と理由を述べてはいるが、ここでKは仕事上のライバルJに故意に無礼な振る舞いをする。フェイス侵害行為である。

次のターンでJ(08)はKの本に目を留めて「相手への興味を示す」というポジティブ・ポライトネスを使うが、K(09)はDo you mind.(やめて)と制止する。

(Kの制止にもかかわらず、JはKと同席する)

- 10 W: Can I get you something?  
→ 11 K: (to W) No, he is not staying.  
12 J: (to W) Mochacino, decafe, non-fat.  
→ 13 K: (to J) No, no, you are not staying!  
→ 11 J: I'll stay until your friend gets here. Is he late?

(10)から(14)は場面3に続くシーンである。ここでもKはJのフェイスを侵害するような行為を続ける。W(10)でウェ이터がJに注文を尋ねるが、K(11)はJを遮りWにNo, he is not staying(直ぐ帰るの)という。続けて、K(13)は

Jに向かって ‘No, no, you are not staying!’ (だめよ, 帰って)と直接命令するも, J(14)で, Jは I’ll stay until your friend gets hereと拒絶する。敵対する二人はあえてお互いのフェイスへの侵害行為を行っていることが言語表現上からも読み取れる。まず, K(11)の相手の発話を遮ることはポジティブ・フェイスの侵害行為である。次に面と向かって直接you are not staying”!と人称代名詞youを使うのはネガティブ・フェイスの侵害である。ネガティブ・ポライトネスのストラテジーに「人称代名詞Iとyouを避けよ」(Avoid the pronoun ‘I’ and ‘you’ )とある<sup>16)</sup>。

### 3.3 動的ポライトネス

ここではポライトネスを動的なものとして捉え分析を試みる。ポライトネスは相対的なものでありまた動的なものでもあるといえよう。相手との親疎関係(D)や力関係(P)またFTAの負荷(R)により選択されるストラテジーが違ってくるため、両者の関係が変わればその選択も動的に変わりうる。ここでは両者の関係の変化が言語表現にも現れるスタイル・シフトに着目する。

#### 場面4

(背景:Kのアパートのインターフォン越しの会話. ブザーに答えて)

- 01 K: Who is it?  
 02 J: It's Joe Fox.  
 03 K: What are you doing here?  
 → 04 J: May I please come up?  
 → 05 K: No. I don't really think that that is a good idea, because...  
 I have a terrible cold. Can you hear that? I'm sniffing and not really awake (...) And taking echinacea (...) and vitamin C, and I'm practically

sleeping twenty-four hours a day, and I have a temperature. And I think I'm contagious

→ so I would really appreciate it if you would just go away.

06 J: (Knock, knock, knock, knock)

場面4はネガティブ・ポライトネスを使った依頼-断りの応答場面である。J(04)は許可を求める依頼, K(05)はそれに対する断りである。K(05)では, まず直接表現のNoのあと不同意表明に加えて断りの理由を並べる。そしてターンの最後にso I would really appreciate it if you would just go awayとJに立ち去るよう要請する。断定文, 仮定法標識, 仮定法(assertion + subjunctive + subjunctive)を組み合わせた複雑な慣習的間接表現である。表現は丁寧であるが, Jの意図するところは拒絶である。この後, 映画でJはKの拒絶にも臆せず強引に部屋に押しかける。

#### 場面5

(背景:JがKの部屋に強引に押し入った後の会話. Kは風邪気味である)

- 01 K: ...I don't mean to say things like that.  
 No matter what you have done to me, there is no excuse for my saying anything like that. But every time I see you--  
 02 J: --Charming.  
 03 K: I was not charming.  
 → 04 J: Well, you looked charming. Tea?  
 → 05 K: Yes. I was upset. And I was horrible.  
 → 06 J: Honey?

さて, ここで場面4と場面5からスピーチレベルを比較するとポライトネスのレベルにおいてス



タイトル・シフトが観察される。場面5のJ (04), K (05), J (06) はJがKにお茶を勧めている場面であるが, Tea? Yes. Honey? と非常に簡潔な表現でやり取りがなされている。直前の場面4のスタイルと比較すると間接的で複雑な表現(ネガティブ・ポライトネス)から直接的で短い表現(bold on record)へとスタイル・シフトをしていることが分かる。人に退去を求める場合の(場面4:05)とお茶を勧める場合では負荷の度合い(R)は違うが, それを考慮に入れてもこのスタイル・シフトからJとKの関係に変化が生じ両者は親近感を抱き始めたことが見て取れる。この場合, Would you like a cup of tea? という表現の選択もあり得るからである。

本項ではポライトネスを動的なものとして捉えてみてきたが, 次は発話連鎖の中でポライトネスを観察する。

### 3.4 発話連鎖からみたポライトネス

ここでは発話連続の中でポライトネスをみていく。断り行為などのFTAを行う際には単に発話行為が単独で発話されるということではなく, 例えば, 勧誘や申し出の場合, 勧誘/申し出と断りが何度も繰り返されて最終的に受諾かあるいは拒否がされるものである。申し出を断る場面6, 勧誘を断る場面7, そして勧誘を受諾する場面8から分析を試みる。

#### 場面6

(背景: WとAは初対面同然である。出会い頭に衝突した拍子にWはAにオレンジジュースを浴びせてしまう。AはWのアパートで身繕いをするのだが, そのときの二人の会話である。Wは一市民, Aは女優である。)

→ 01 W: Would you like a cup of tea before you go?

→ 02 A: No.

→ 03 W: Coffee?

→ 04 A: No.

→ 05 W: Orange juice (...) probably not.

→ 06 W: Um, something else cold (...)

→ 07 A: No.

→ 08 W: Would you like something to eat?...

→ 09 A: No.

10 W: Do you always say 'no' to everything?

→ 11 A: No (...) I'd better be going. Thanks for you, uh, help.

12 W: You're welcome, and, uh may I also say, um, heavenly.

場面6は申し出(offer)とそれに対する断りの例である。(01)から(09)まで申し出と断りが繰り返され11番目のターンで最終的に拒否がなされている。Brown & Levinsonによると, 申し出を受諾する行為はFTAであり, そのため勧めと断りを何度も繰り返した上で最終的な受諾か拒否がなされるとある<sup>17)</sup>。この場面ではWの申し出表現はポライトであるが, ジュースを浴びせられて憤慨しているAの受け答えはポライトとはいえない。Noを繰り返すのみでFTA軽減のための方略が全く講じられていない。ターンを重ねた後, 最後のA(11)で理由と感謝を表明し最終的に断りが完結する。

#### 場面7

(背景: デートのあとホテルまで送ってきたWをAが誘う場面)

01 A: Here we are.

02 W: Yes. Well look (...)

→ 03 A: Do you wanna come up?

→ 04 W: (hesitates) Well, there seems to be (...) lots of reasons why I shouldn't, so (...)

→ 05 A: There are lots of reasons. Do you

- wanna come up?  
 → 06 (His look says yes)  
 07 A: Give me five minutes?

場面7では「誘い」-「ためらい」-「誘い」-「受諾」の連鎖がみられる。W (04) でWは誘いを受けてもいいものかと躊躇いをみせるが、再度Aが誘うと受諾をする。申し出と同じく誘いを断る行為も相手のフェイスの侵害行為であるため、このようなターンの繰り返しのうえ受諾がなされているのである<sup>18)</sup>。

### 場面8

(背景：街で偶然出会うことが重なりKとJは次第に親しくなる。この場面も偶然出会った二人がベンチで話しているときの会話である)

(…)

- 01 K: Well, I keep on bumping into you.  
 Hope your mango's ripe.  
 → 02 J: I think it is. Hey, you wanna bump  
 into me on, say, Saturday around  
 lunch time?  
 → 03 K: Yeah.  
 04 J: Over there?  
 05 K: uh-huh.  
 06 J: Good!

場面8は誘いを受諾する場面である。ターン(01)の前ではKとJは冗談を言い合っているのだが、Kの(01)に触発されるようにJが誘いの提案をする。ここでは二人の心理的距離はかなり近くなっているためJ(02)にあるように間接性のレベルはかなり低い。疑問文の文型をとらないイントネーションによる疑問であること、仮定法のwould you likeではなく口語的なwannaと言っていることから分かる。またheyやYeah, Uh-huh

は親しい関係で使われる表現であり、「仲間意識を強めるマーカーを使え」(Use in-group identity markers)というポジティブ・ポライトネスのストラテジーのひとつである<sup>19)</sup>。

さて、これまで発話連続体からポライトネスを見てきたが、次項では、FTAを回避することによりフェイスの保持が図られる例をみる。

### 3.5 FTA回避によるフェイスの保持

ここでは先行連鎖(pre-sequence)に着目する。先行連鎖とは「これから起こる行動をほのめかすことにより、その後の行動での協調を促すか、あるいはその行動をさけるように協調することをもとめる」発話のことである<sup>20)</sup>。場面9からその例を見ていく。

### 場面9

(背景：雑誌記者のふりをしたWが女優Aの会見場に忍び込みAにインタビューをする。JはAのマネジャーである)

- 00 J: Time's up, I'm afraid. Did you get  
 what you wanted?  
 01 W: Um, nearly, nearly.  
 02 J: Well, maybe just one last question.  
 03 A: Sure (clears throat)  
 04 W: Right, right.  
 (Jeremy goes out)  
 → 05 W: Are you busy tonight?  
 → 06 A: Yes.  
 → 07 W: Right, right

場面9は先行連鎖を含む応答の例である。ここでW(05)のAre you busy tonight?は勧誘を行う前の先行発話であるが、A(06)がYesと返答したのを受けてWは誘いのことばを引き留める。誘いをした後に相手が断ると話し手のフェイスが侵



害されるため、この先行連鎖はそれを避ける効果を果たしているのである。Brown & Levinsonはこのような先行連鎖もまたはフェイス保持のストラテジー (face-saving strategies) であるとする<sup>21)</sup>。さらに、先行連鎖は明示的な行動を起こす前に、オフレコでのやり取りを可能にするとする。

Pre-sequences and 'fishing' thus allow the off-record transaction of business with face implications well in advance of the possible on-record transaction (p.40) .

このように先行連鎖もポライトネスの観点から見るとFTAを回避するための巧みなストラテジーであるといえる。

#### 4. 考察

ここでは前節の分析をもとに考察をする。談話レベル、会話レベルでポライトネスを捉えることによりポライトネスは相対的なものであり、また動的なものであるということが分かった。そこから1) 話し手と相手との関係と言語表現との関連、2) 関係の変化に伴うスピーチレベルのシフト、3) ポライトとポライトネスの逸脱、4) FTA回避ストラテジーとしてのポライトネスの4点から考察を試みる。

最初に、話し手と相手との関係と言語表現との間の関連を考えると、両者の力関係 (P) よりも親疎関係 (D) が言語表現に影響していることが分かる。場面1を見ると大人から子どもへの発話においてもポライトな言い回しをしていることから、子どもを年少者として扱うのではなく対等な関係として捉えている。直接表現 (bold on record) で指示を行うのは力関係によるのではなく緊急の場合などそれ以外の要因によるものであ

ることが分かる。

次に親疎関係と言語表現の関連を考えるため、場面3と場面8を、同じく場面6と場面7を比較する。場面3ではKとJの心理的距離は遠くKはWould you mind if I sat down?という表現で依頼をしているが、一方、Kと親しくなった場面8でJはHey, you wanna jump into me, say, Saturday around lunch time?という。次に場面6では初対面に近い状況でWはAにWould you like a cup of tea before you go?という一方、両者が親しくなった場面7でAはWにDo you wanna come up?という表現を使用する<sup>22)</sup>。このように見ると両者の関係が遠い場合には間接性の高い表現が使われ、関係が近くなるにしたがって言語表現としては単純な表現を使用している。

さらに、言語表現は相手との距離を調整する手段としても機能していることが分かる。場面4のK (05) ...so I would really appreciate it if you would just go awayという表現は丁寧さを表すよりも丁寧な表現を使うことで相手を遠ざけようと操作しているのではないか。

そして、面識のない相手やウェイターと客など接客の場面の会話においては表現が慣用化されている。場面3では面識のない相手に対するDo you mind if I borrow this chair?という表現や、ウェイターのWould you like another tea?という表現である。Brown & Levinsonは慣用的間接表現の発達について次のように述べている。

例えば相手に依頼をする際にはその意図を明示的に伝えなくてはならないが、その一方相手のフェイス侵害度を低くするためには言語表現は相手に逃げ道 (out) を与える非明示的なものでなくてはならない。前者の目的のためには図1の「直接的であれ」というストラテジーをとることになり、後者の目的のためには「間接的であれ」というストラテジーをとることになる。このように依

頼行動にみられる類いの葛藤はどの文化・社会でもおこりうるが、英語圏社会では互いのフェイスを維持しながら目的の行為を遂行するために直接的な命令を表さない文形式が「慣用的間接表現」として社会に定着したとある<sup>23)</sup>。

第二に、ポライトネスは場面や状況、両者の関係に応じてダイナミックに変動するものでもある。前節の場面4や5で述べたように、相手との関係の変化に伴いストラテジーの選択もシフトする。上で述べた場面3と場面8も親疎の変化にもなうスタイル・シフトの例である。

次に、談話レベルでポライトネスをみることで、ポライトな応答とポライトネスに適っていない、つまりポライトネス逸脱行為の両方をみることができた。場面3でみた相手のターンへの割り込みや、面と向かってNo, no, you are not staying!と主語としてyouを使うことなど相手のフェイス侵害するような行為はポライトネスの逸脱行為である。Brown & Levinsonのポライトネス理論はポライトネス逸脱に関しては体系的には扱っていないが、宇佐美は「逸脱を相手のフェイス侵害度を軽減する努力をしないことが自ずと生む効果と捉えれば、非礼や無礼な振る舞いもポライトネス理論からの説明が可能である」とする<sup>24)</sup>。

さらに、前節でも述べたが、申し出/勧誘とその受諾/拒否の応答の場合、申し出/勧誘を受諾することはFTAであるためすんなりと承諾されるというのではなく、例(2)のように申し出-断りの応答を複数回繰り返した後に承諾/拒否を行うパターンをとることが普通である。

(2) A1: Would you like a drink?

B1: Oh, no, It's all right.

A2: No, I insist.

B2: OK, I'd love a double whisky.<sup>25)</sup>

場面6では申し出-拒否の繰り返しを、場面7では勧誘-承諾を行う場合のターンの繰り返しをみた。

最後にFTAを回避することもフェイス保持のためのストラテジーである。例えば人に何かを頼みたい時、いきなり「辞書をお借りできませんか」というのは唐突である。依頼に先立ち、日本語の場合であれば「あの～、すみません。辞書をお持ちですか」とまず尋ねてみる。相手が持っていなければ依頼をしないで済むわけである。依頼を例にLevinson (1983) は「依頼応答体系のもとでは依頼を断ることは好ましくない…そこで依頼先行語句 (pre-request) を用いる最大の理由は依頼がうまくいきそうかを確認しうまくいきそうでなければ、拒否という好ましくない応答をさけることを発言者に可能にすることである」としている<sup>26)</sup>。ポライトネス理論から考えると依頼先行発話をするにより依頼というFTAの回避が可能となるのである。ここでみたようなフェイス保持のためのストラテジーは談話の流れのなかでポライトネスを捉えなければ掴めない。

## おわりに

本稿では、Brown & Levinsonのポライトネス理論を基に映画の会話場面を分析した。その結果、ポライトネスは発話の状況や話し手と相手との関係などによりダイナミックに変動する相対的で動きのあるものであることが確認できた。

また会話場面を分析したことにより、ポライトネスに適った発話のみならず、ポライトネス逸脱ともいえる言語行動も炙り出すことができた。「断り」を含む談話を抽出したため、特にこのようなポライトネス違反ともいえるデータを収集することが可能となったが、このような発見は英語教育にも貢献することができよう。相手を不快にさせ

ない発話とはどのような表現なのか、またある言語行動はなぜ無礼なのかを知ることは言語の語用論的な面への意識を高めることにもなるだろう<sup>27)</sup>。教育の場で生かしたい。

## 註

- 1) 生田 1997 p.66
- 2) 宇佐美 2003 p.118
- 3) Brown & Levinson pp68-71. 宇佐美 ibid. p.119
- 4) 宇佐美 (2001) はディスコース・ポライトネス理論というのを提唱している。
- 5) 隣接ペア (adjacency pair) とは、問い-返答、挨拶-挨拶、申し出-受容などがその典型である。隣接ペアは、i) 隣り合っていること、ii) 異なった話者に依るものであること、iii) 第一部分と第二部分という順序があること、iv) 第一部分が決まった第二部分を要求すると言う意味で、例えば申し出は受容または拒否を、挨拶は挨拶を要求すると言う具合に型にはまっていること、のような二つの発話の連続である。(Levinson 1983 安井他訳 376-77)
- 6) 映画はフィクションであるため完全に自然な会話とはいえないが、Kasper は会話が自然でなければ鑑賞に値しないとする (Gabriele Kasper 氏 個人談話 1998 年 3 月 25 日)。
- 7) Fraser (1990) はこれまでのポライトネスの中心的論考を概観している。また宇佐美・阪本・滝浦・橋元 (2001) にポライトネスの基本的用語の解説がある。
- 8) 宇佐美他 2001 p.71
- 9) 宇佐美他には、face については「面子」、「面目」、「顔」などと訳されることもあるが、それらの訳語ではこの語を、「文化的に固有の概念」と捉える傾向を強めるとして、片仮名表記の「フェイス」が用いられるとある (2001 p.70)。宇佐美他に従い本稿においても「フェイス」の表記を用いる。
- 10) 宇佐美他 2001 p.70
- 11) Brown & Levinson 1987 p.61
- 12) ibid pp.65-68
- 13) 生田 1997 p.67
- 14) Brown & Levinson 1987 p.76

- 15) You've got mail は音声と DVD の英語字幕ともに文字化したものを使用し、Notting Hill は同じく DVD の英語字幕と書物 Notting Hill の両方を使用した。
- 16) Brown & Levinson 1987 pp.197-98
- 17) ibid. 233
- 18) ibid. 233
- 19) ibid 107
- 20) Levinson 1983 安田訳 p.426
- 21) Brown & Levinson p.39
- 22) A は女優、W は一般人という設定から力関係の差ということも考えられるが、映画のストーリーから A は女優としてではなく一般人として W と付き合っている。
- 23) Brown & Levinson 1987 p.132 堀 2006 p.58
- 24) 宇佐美 2003 p.127
- 25) Brown & Levinson 1987 p.233
- 26) Levinson 1983 安田訳 p.441
- 27) 大橋 2006

## 引用文献

- Brown, P. & Levinson, S. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
- Curtis, Richard. 2007. *Notting Hill*. 松柏社
- Ephron, N. and Ephron, D. 1998. *You've Got Mail*. DVD.
- Fraser, Bruce. 1990. Perspective on Politeness. *Journal of Pragmatics*. 14 219-236
- Goffman, Erving. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior*. Doubleday.
- Grice, Paul. 1975. Logic and Conversation. *Syntax and Semantics*. 3 *Speech Acts*. Academic Press. 41-58.
- 堀素子 2006. 「英語の慣用的間接依頼表現」『関西外国語大学研究論集』84, 57-74
- 生田少子 1997. 「ポライトネスの理論」『言語』26 (6), 66-71
- Lakoff, Robin. 1973. The logic of politeness; or minding your p's and q's. *Chicago Linguistic Society*. 292-305
- Leech, Geoffrey. 1983. *Principle of Pragmatics*. Longman.

- Levinson, C. Stephen. 1983. *Pragmatics*. Cambridge UP. 安井稔・奥田夏子訳 1990. 『英語語用論』 研究社
- 大橋まり子 2006. 「言語能力と語用論的能力—初級レベル英語学習者の「断り」から」『湘北紀要』 27, 53-67
- 宇佐美まゆみ 2001. 「談話のポライトネス—ポライトネスの談話管理構想」『第7回国際シンポジウム報告書』 9-58 国立国語研究所編
- 宇佐美まゆみ 2003. 「異文化接触とポライトネス—ディスコース・ポライトネス理論の観点から」『国語学』 54 (3), 117-132
- 宇佐美まゆみ・阪本俊生・滝浦真人・橋元善明 2001. 「ポライトネスのためのキーワード集」『言語』 30 (12), 68-72

Politeness in Sequences of Utterances  
- Analysis of the American Films -

OHASHI Mariko

**[abstract]**

This paper examines how politeness is realized in discourse by analyzing the data from American films using Brown and Levinson (1987). The focus of analysis is on the adjacency pairs such as requests and acceptances/refusals, offers and acceptances/refusals, and invitations and acceptances/refusals. The result shows that 1) politeness is not static but dynamic, 2) the speaker and hearer exchange many turns as strategies for FTA-handling before the hearer reaches acceptance or refusal, and 3) pre-sequences such as pre-requests function to allow the off-record negotiation with face implication in advance of on-record transaction.

**[key words]**

politeness, face, conversation, adjacency pair, style shift



